国際研究論叢　18（3）：129～139，2005

翻訳〔抜粋〕

ダイアン・ロング・ホーヴェラー著

『ゴシック・フェミニズム―ジェンダーの職業化、シャーロット・スミスからブロンテ姉妹まで』

第５章Ⅲ「文明化の過程の勝利―ブロンテ姉妹とロマンティック・フェミニズム」

（Pennsylvania: Pennsylvania State UP, 1998, pp.203－212）

ダイアン・ロング・ホーヴェラー

訳：上　岡　サト子*

Dian Long Hoeveler; Section Ⅲ Chapter 5, "The Triumph of the Civilizing Process; The Brontës and Romantic Feminism" *in Gothic Feminism: The Professionalization of Gender from Charlotte Smith to the Brontës*

（Pennsylvania: Pennsylvania State UP, 1998, pp.203－212.）

Dian Long Hoeveler

Translated by Satoko Ueoka*

Abstract

This is the partition of the translated version into Japanese of *Gothic Feminism*. The author, Diane Long Hoeveler analyzes the representative female gothic novelists of English literary world in the late eighteenth and early nineteenth century, focusing on Charlotte Smith, Ann Radcliffe, Jane Austen, Charlotte Dacre Byrne, Mary Shelley and the Brontës. Hoeveler's study revealed that what the female gothic genre tried to construct consciously or unconsciously was a discourse system for helping white bourgeois women, the newly emerged but feeble class in a changing society: "professional femininity"―a cultivated pose, a masquerade of docility, wise passivity, and tightly controlled emotion. She defines this as the professionalization of gender.

＊うえおか　さとこ：大阪国際大学法政経学部非常勤講師〈2004.12.９受理〉

In the female gothic novels, “heroines” are mostly depicted as victims of patriarchy in motherless and male dominant situations. Hoeveler says that the “victim feminism” criticized by the third generation feminist, Naomi Wolf, can be traced to those heroines’subversive struggles.

However, Hoeveler discovered “gothic feminism”, which presents a new interpretation of the gothic heroines like CathrineⅡ in *Wuthering Heights*, Jane Eyre in *Jane Eyre* and Lucy Snowe in *Villette*.

Key Words

Diane Long Hoeveler, gothic feminism, professionalization of gender, the Brontës, Romanticism, *Jane Eyre*, *Wuthering Heights*, *Villette*

妹のエミリーが『嵐が丘』を創作中であった時期に、シャーロット・ブロンテは、『ジェイン・エア』を書いていた。二人がよりバイロン的であらんとして競いあったことについては、一世紀にわたり、多くが語られてきた。世紀を経てもその人気が衰えない『ジェイン・エア』が、この競争に勝ったようだ。荒涼として、妥協を許さぬ『嵐が丘』が、読み手の心に時には苦痛与えて、先に進めなくするのとは違い、『ジェイン・エア』は女流ゴシックの正典（キャノン）と言えるテクストとなった。きゃしゃな女性が、貴族的な欲望やプライドは儀式的に飼いならされ摘み取られた父親のような野獣と恋愛し、家庭を持つ元型的な夢物語が、何度も繰り返し映画化してきた。(注14) ジェインは、ゴシック・フェミニストの優れた具象として、エミリーやエレーナやその他全てのゴシック・ヒロインたちが、全く存在していなかったかのように、このヒロインがジャンル全体を代表するようになった。

しかし、他のヒロインたちが存在していたのは確実である。なぜなら、ジェイン・エアは、全てのゴシック・フェミニストのヒロインの蓄積された方策からヒントを得て、ロチェスターにねらいを定めて好意を抱かせ、狂気の妻を押しのけると同時に彼女に代ってその地位に納まるからである。ジェインは、財産や地位、愛、援助、後ろ盾となる家族も持たない孤児として人生を開始する。しかし、財政的に豊かだが、死に至るほどの傷は負うていない夫と、相続人となる第一子の息子を従えてその物語を結んでいる。彼女の語りに自画自賛の趣があるとすれば、それは誇らしく語る権利を得たということに尽きる。彼女はあらゆるゴシック・フェミニストがしなければならなかったことを成し遂げたのである。すなわち、自身が家母長的で、脅かされる心配のない強力な地位を背景に、自力で新しい家族を生み出したのである。信じられない話だが、ジェインは、子供の出産を無事果たし、ゴシックのヒーローと生活し物語を語る唯一人のゴシック・フェミニストである。しかし、周知のように、彼女のゴシック・ヒーローは、飼いならされ儀式的に傷を負っている。片方の目の視力を失くし、片手をもがれ、愛する妻に何もかも依存しなければならないロチェスターは、女流ゴシック・ファンタジーに見られる男性の犠牲者を体現する究極の人物である。彼は怪我をした父親であり、安全な夫であり、罰を受けた家長であり、男性である。もっと正確に言えば、ゴシック・フェミニストが、かりにも一人の男性と共

棲しようとするなら、相手は、牙を抜かれた、無力な男性でなければならない。

『ジェイン・エア』が、ゴシック・フェミニストのテクストとしてどのように機能しているかを理解するには、ジェインの人格形成の検証から始める必要がある。すなわち、幼児体験と有名なローウッド学院で受けた「教育」を通じてどのように形成されたかである。大方のゴシック・ヒロインたちのように、ジェインは意地悪な伯母に養育された孤児で、伯母は期待の持てない自分の子供たちの中で、存在感のあるジェインに腹を立てている。ジェインの性格が、この伯母や三人の従兄妹に抵抗する中で形成されたことは、さほど驚くことではない。家族みんなでヒロインに対して、身体的、感情的、心理的に何らかの形の虐待を加えるからである。従兄弟のジョンは、彼女は「物乞いをすべきであり、われわれのような紳士の子供とここで暮らすべきではない」（８）と親切にも通告する。一方、家政婦のアボットは、ジェインが働かずに生きる糧を得ていることから、「使用人よりも下です」（９）と言う。[注15] 家の中で味方であるベシーでさえ、「一つ屋根の下でこれまで養育された最も意地の悪い、見捨てられてあたりまえの子供」（23）とジェインに告げる。後にベシーは、もし彼女が人と穏やかに付き合えず、作法をわきまえていなければ、いつでも家から追い出されるだろうと警告している。「物心がつき始めた頃の記憶の中に、同じ種類の暗示が含まれている」とジェインは語る。棄てられることへの恐れは、ジェインの心の奥底にわだかまっているのではない。「居候であることの非難は、わたしの耳にはぼんやりとした歌声となって響き、とても辛くて押しつぶされていた」（10）と語っている。幼いジェインは、「〔彼女の〕の胸の中に沸き上がってくる不快な感情を後生大事に」抱えて、敵に復讐をしようという欲望で「毒」されてきた。この種の子供が成功することを予測することは一般的に難しい。この少女はすでに生活で押しつぶされ、運に見放され、修復不可能な傷を負っているように見える。子供時代の痛みや心の傷は、このゴシック・フェミニストを強靭にするだけである。なぜなら、彼女の意思、望み、そのエネルギーは、敵対者のそれらよりもはるかに強くなっているからである。敵対者たちはただの人間にすぎないが、彼女はヒロインであり、正当性を証すメロドラマではヒロインは常に勝利する。

しかし、ジェインは自らが語り、作り上げた理想像に辿り着き、かつて彼女を傷つけたり、見くびった全ての者に対して勝利する前に、火事、いじめ、残虐行為、そして内密にせよ、大っぴらにせよ、あらゆる種類の屈辱の恐ろしい試練に耐え抜かねばならない。最初に現れる手強いネメシスは、従兄弟のジョン・リードである。彼は、ジェインを「一週間に二度や三度ではなく、一日に一度や二度でもなく、絶え間なく」虐待している。「彼が近寄ってくると、わたしは全神経で彼を恐れて、私の骨についた肉のひとかけも逃さず縮んでしまっていた」（７）。明らかにジョンの巨体そのものに脅えながら、ジェインは――先輩のエミリーやエレーナのように――人をいじめる者は、十分な時間と場があれば、必ず自滅することを学んでいる。大人になったジョン・リードは、酒食にふけり、賭博で奈落の底に落ちる。自殺する以外に、彼をそこから解放する道はないのである。シンデレラの姉妹のように、彼の姉妹は同じような破滅的な運命を辿る。ジョージアナは、兄のジョンのように、口の卑しい子供で、成長と共に肥って不幸な結婚をした婦人となる。一方、

イライザは、肛門期保持的で、強迫感にとらわれて、フランスの修道院で人生を終える。我々は、『ユードルフォ』と同じく、『エメリーン』のアンチ・ヒロインの運命を思い出す。放縦で注意の行き届かない怠惰な母親のあやまちが原因で哀れな人生を辿るこの三人は共に、必死に人生の成功とエネルギーを生み出そうとしているジェインとは、正反対のところにいる。男性の相続人と二人の富裕な女性（すなわち貴族）が、社会の中であらゆる強みを持っているとしても、もし成功するつもりならば、自分を律して、働かなければならないというのがブロンテの主張である。これは、ジョン・リードと彼の救いようのない姉妹が出来なかったことである。ブルジョワジーとその職業倫理は、この小説では大々的に勝利する。

ジェインは、子供の時、ジョンのいじめの「脅威」と「災難」に対して、「助けを求めて訴えることが少しもなかった」（８）と感じているかもしれない。しかし、こうした幼い頃の虐待は、後にローウッドで生かせる貴重な教訓となる。すなわち、耐え忍んで、そして時節の到来を待つことである。ジェインの伯母は――家を切り盛りする権威を持つと考えられる人であるが――ジェインをかばうことも保護することもしない。一方、使用人たちはジェインと同じく無力であり全く役に立たない。しかしながら、ジェインは、その家族の権威ある人物の無能と、その堕落を目の当たりにして、価値ある教訓を学ぶ。彼女は、家族のような権力構造は本来保護を与える救助網として機能するものであると早くも学習している。既述のエメリーンのように、彼女には保護してくれる人がいない。ジェインの物語は、納得のいく自分の保護者を捜し出したいという彼女の願望が原動力となって展開されている。しかもその保護者は、最終的には、彼女に完全にコントロールされることになる人物である。若い頃のジェインが、「人から情けをもらっても、どうなるものでもない」（12）と嘆くのに対し、成熟したジェインは、「情け」――保護と報酬――は最後には勝ち取る価値のある唯一の対象であることを知っている。ジェインは、子供の頃は、「絶え間のない虐待と報われない辛い仕事の人生」を辿るだろうが、しかし成人した後には、決して罰せられることがなく、富裕な夫と自分に仕える使用人を持っている。ここでは、おとぎ話の筋立て――身分の低いものが勝利し、身分のあるものが落ちぶれる――が生きており、小説としての『ジェイン・エア』は、多くの女流ゴシックのテクストと同様、ある種の願望の充足の物語となっていることを示唆している。

しかしながら、我々が小説と呼ぶ原稿を書いている大層な自我は、憎むべき敵を必要としている。なぜなら、彼らが没落し罰せられることは、ヒロインにとって、潔白の証明として一層気分爽快なものであるからだ。人生はがむしゃらに闘ってこそ報酬が与えられる。ゴシック・フェミニストは、特にヒロインが勝利の確信を心に刻んだときには冷酷な略奪者との闘いをひたすら好むのである。ジェインが女流ゴシックのヒロインになれるのは、彼女には、虐待を受けた子供時代を、他の人々が彼女に代わり苦しむ破滅のシナリオに変えることが出来るからである。バーサは粉々になる程打撃をうけるのか？ジェインの手に負えない情熱はそれでおしまいになる。ヘレン・バーンズは悲惨な死を遂げるのか？自分自身を生贄としてささげ、自分に罰を与えるジェインの傾向はこれで静まるだろう。このような非常に寓意的な小説では、ほとんど全ての登場人物は、ヒロインの心の内で分裂し

た諸傾向を演じているのである。そうした人物のおかげで、安全な大人の語り手としてのジェインは、損なわれることなく汚れない存在として現れるか、少なくともそのように見えることが可能なのである。しかし、そのような工夫は、単にジェインの心の痛手を白日の下に曝すのを助けるだけであることに注目してほしい。それはあたかも、苦しみをひけらかすことで、彼女を挫折させようとする愚かな人に対して、彼女自身を正当化するかのようである。他者からの「わずかな愛や親切なしに」生きているジェインは、最初の十年間の人生を、一連の自己防衛戦略をマスターすることに費やすのである（31）。

多くの女流ゴシック・ヒロインのように、最初、ジェインは本に逃げこもうとする。しかし、ジェインの文学の趣味は少しばかり病的で風変わりなものである。(注16) 彼女がビュイック（Bewick）の『英国鳥禽史』を見るとき、後に描かれた彼女の絵の中で証明されているように、彼女は実は、架空の死体――おそらく空想の中の彼女の両親の再現――そして鵜を思い描いていることが分かる。この幼い時でさえ、ジェインは虐待に満ちた心象風景に没頭し、自分が獲物を狙う様々な鳥の餌食になるか、より無意識的には、自分を攻撃側の人間となるような想像をしているようだ。リード夫人が、ジェインに「もっと率直で、自然な態度」を見せるよう求めたとき、彼女は窓際の椅子の前にあるカーテンの背後に隠れてようやく返事が出来る（5）。この行為は、この子供が信頼を寄せていないために、相手に対して感じていること――攻撃的感情、敵対心、怒りそして復讐――を隠したいと思っていることを意味している。すなわちジェインは、獲物を狙う大きな不気味に立ちはだかる鳥――伯母と従兄弟のジョン――の何の罪もない犠牲者として彼女自身を考えたいのである。しかし、やどり木が嫌がる宿主に寄生するように、彼らに依存しつつ、あたかも彼らを食い物にするような経験をしているのは、実際にはジェインの方である。

ここで起っているものは女流ゴシックのテクストにたびたび現われる一つの犠牲者と攻撃者のシナリオ、打擲ファンタジーである。犠牲者と攻撃者との間で生じている奇妙な共生は、いったん虐待のサイクルが始まると、誰がその痛みを感じ始めたか、誰が犠牲者か、誰が攻撃者かを問う方法はもはやないのである。(注17) ジェインの立場から見ると彼女が犠牲者である。自分のことを我々に次のように語っている。すなわち、「あの不当な罰を受けてから生じた恐怖心というものが、その頃のわたしを、なんというみじめな臆病者にしたことであろう！」（26）。ジョン・リードは、ジェインを「陰気な奥さん」と呼んでいる。そして若いジェインは、今日では医学的治療が必要と認められるうつ病に苦しんでいる。彼女は自ら認めているように、「いつもの屈辱感、自己不信、みじめな憂鬱」の犠牲者である（13）。ジェインが自分自身を、不当に扱われている犠牲者であると見ていることは正しい。しかし、リード夫人の立場から眺めると、ジェインは、「社交性に欠け、子供らしさがない」のであり、代わりに、「毒気のある癇癪持ち、さもしい精神、危険な二枚舌を混ぜ合わせたものである」（14）。二枚舌の非難はキャサリン１世に対してなされた。そして後に、ルーシー・スノウに対してもなされることになる。ゴシック・フェミニストは「二枚舌である」ことを強いられるか、あるいは少なくとも単に生き延びるために、敵の目には二枚舌であるように見えるのである。もし女性が、二枚舌でなければ、彼女の土地、家族、そして最後には彼女の命を奪う同じ力によって、誹謗中傷され、捏造されたあげく、

忘却されるのである。

ジェインがビュイックの『英国鳥禽史』を精読しようと、朝餐室の窓際の席に隠れ処を求めたとき、安全で暖かく食べ物に事欠かない避難所で、自分を繭のようにすっぽりくるみ、犠牲者と攻撃者、鳥とその餌食という自己創作になる世界を空想しながら閉じこもるのである。ちょうどその時、ジョン・リードに邪魔をされ、彼女のゴシック的想像の源であり、逃避の手段であるその書物で攻撃されて、堪忍袋の緒が切れてジェインの感情は爆発する。最初は言葉で攻撃し、彼の残酷さと邪悪さを告発するが、彼が再びジェインに襲いかかったので、ついにジェインは反撃をする。すなわち、「わたしは逆上してジョンに抵抗した。わたしの手がどう動いたのかよくわからない。ただ、彼がわたしのことを、「裏切り者、裏切り者」と呼び、大声で怒鳴っていた」（9）。打擲ファンタジーは、ここで実際に身体的な攻撃が行われて、去勢ファンタジーと一体化する。ジェインは、もはや窃視者でも、受身的な関係者でもなくなり、打たれ、そしてとうとう打ち返すのである。

この出来事の驚くべき面は、虐待された扱いに彼女が爆発するまで、十年かかったことである。ベシーは、「ジェインは以前には決してこんなことはなかった」ので、ジェインの爆発が理解できないと思っている。アボットの方は、ジェインを下層階級の革命の始まりとするリード夫人の見解に賛同している。「いつもそうなのだ」、その上「陰険なところがある」、すなわち、「彼女のような年齢であれほど猫かぶりな女の子を見たことがないわ」（10）と言う。「猫かぶり」は、駆け出しのゴシック・フェミニストが発展させる必要のあるまさにそのもので、我々はそれを称して保護的なカモフラージュと言っている。蝶が周囲の環境に溶け込むために利用する一種の保護色である。しかし、ジェインは蝶ではない。彼女は絶望して、自分を抑圧するものに恨みを晴らすために、「どんなことでもする」と決心している。ラッダイトの革命家のように、彼女は「反抗する奴隷」の気分を経験している。ジェインについてのここでの描写は、その後のロチェスターによって動物のように監禁された絶望的なバーサについての彼女の描写と共鳴していることを我々は思い出す。バーサはジェインの攻撃性であり、怒りであって、彼女を、全ての女性同様依存的で補助的な地位に置いている交換システム〔結婚〕に対する、階級に基礎をおく攻撃なのである。しかしながら、ジェインが十歳になって顕わにした態度は、彼女にとって「新しいもの」である。彼女は逃走か、自ら食を絶つことによって逃げ出す決心をしている（9）。どちらの選択肢も彼女には可能ではない。代わりに、伯母の手によって、すばやい残酷な処罰が下される。

ジェインが赤い部屋で過ごすのは、この極めて自意識的な後期ゴシックのテクストの中で、おそらく最初の明白なゴシック的な設定であろう。相続権を剥奪された亡くなったジェインの母の兄弟である彼女の死んだ伯父の霊が、家長が常にその権力の残余財産を支配しているように、この部屋を支配している。赤い部屋のこの家長は、しかしながら、その大きな堂々とした空っぽのベッド、人を生み出す場所の上を彷徨っている。そして、若く思春期前のジェインを悩ませるこの印象的な情景に現れるのは、生殖と子供の誕生の妄想である。ジェインは伯父のベッドを前にして、このことが頭から離れず、嘔吐を催しそうになっていると察せられる。なぜなら、性的欲望を持った女としての伯母のみならず、彼

女自身の両親の性行為の恐怖を漠然と彼女に暗示しているからである。両親が性的存在であることに、うっすらと、漠然とながらも気付くことは、女流ゴシックのヒロインたちにはひどい嫌悪感を催させ、取り乱させる。これが、赤い部屋のシナリオで再現されるものである。我々はまた、『森のロマンス』の中で、殺されるのを待ちながら娘に書き残したテクストから現れる亡き父親の霊を思い起こさせる。ブロンテはこのエピソードにおいて、ゴシック的修辞についての読者の知識を利用して、ジェインを一歩手前のゴシック・ヒロインと提示し、同時にゴシック・ヒロインとしてのジェインの立場を弱めているのである。ジェインは、ラドクリフのヒロインとは異なり、自意識に捕らわれている。(注18) もっと正確に言えば、ジェインは、狂気に陥る覚悟を決めているが、ラドクリフのヒロインをそうした狂気に追い詰めて行く存在論的現実は、この後期のテクストには存在していない。

ジェインは再びビュイックの『英国鳥禽史』の図像に自分を当てはめ、犠牲者と攻撃者のシナリオを想像する。今度は伯父リードの幽霊が、ジェインに対して数々の悪事を企てた妻子に仕返しをするために降り立つというものだ。ジェインは幽霊が見えると思い込み金切り声をあげ伯母に部屋から出してほしいと懇願する。伯母は拒絶し、残酷にも一晩中彼女をその部屋に閉じ込めたため、ジェインはヒステリー特有の自己誘発的発作によって、気絶し意識を失うのである。皮肉にも、女性の度を越した感情に負けたことで、ジェインは医療的な援助と彼女の最初の家父長的な味方――最初の生きた父親的人物――薬剤師のロイド氏を得るのである。思いやりのある機敏なロイド氏は、ジェインを救貧院送りとするより、ローウッドに彼女を送ろうとし、彼女はその困難な旅を始めるのである。その旅は彼女をロチェスターに、そして、ついには、ファーンディーンの主人用寝室へと導くのである。赤い部屋は、いわば、ジェインの孤児であり階級がない地位にいるために負わされた制約から自己解放の道筋を立てるため、ヒロインが書き直さなければならない多くの閉ざされた空間の最初のものを表象している。

しかし、ジェインは、他のゴシック・フェミニストのような寡黙な受難者ではない。赤い部屋の災難の後、彼女は口答えをし、伯母に対して正真正銘の言葉による攻撃を始める。ラドクリフのヒロインは、大抵無言で耐えているが、ジェインは、罪の意識に付込むという手を使い、「もしリード伯父さんが生きていたら、あなたになんとおっしゃるでしょう」と伯母に質問する。要するに、ジェインは、ゴシック・ヒロインには、自分の舌ぐらいしか訴える手段はないのだということを学んだのである。口舌は、傷つけ、中傷することが出来る。それは、伯母の絶え間ない虐待に対する幼いジェインのごく初期の反応だ。それはまた、舌は、歴史を本質的に書き替え、そして自らを圧制と虐待の無実の犠牲者として提示するような物語を語ることも出来る。ジェインの小説――『ジェイン・エア』――は後者の例である。伯母のリードが、訪問中のブロクルハースト氏に、ジェインを嘘つき呼ばわりしたとき、彼女はリード夫人のことを「悪い」「冷酷な心の持ち主」であり、「不正直」だと言って応戦している。可能なときには、「あなたのことを考えると、気分が悪くなります、あなた［リード夫人］は、無慈悲で残酷にわたしを扱った」(31) とあちこちで吹聴すると彼女は言う。

舌はここでは復讐の道具として用いられている。ジェインは、エメリーンがクロフト家

によって誹謗されたのと全く同じ方法で、リード夫人の信望を傷つけると断言している。この小説全体にみられる時代錯誤な貴族主義的伝統は、このくだりで明らかである。信望というのは資産のことであり、誰かの信望に泥を塗ることは、人間の舌というただそれだけの力によって彼らから資産や財産を掴み取ることである。ジェインは新しく発見した言葉による攻撃を利用することによって、新しい「自由の、勝利の感覚」に「酔いしれる」ことが出来る（31）。弱虫は軽蔑され、格好の標的として嫌がらせをされるということに気が付いたとき、ジェインは、恐れるものも誰憚るものもないと決心して、思い切って学校に行くのである。ジェインの子供時代のことを読むと、他のどのゴシック・フェミニストにもまして、彼女が、計画的な心理的および感情的な虐待の辛辣な攻撃をかわす術を身に付けていることが分かる。彼女は、傷を負って人生を歩んで行く者の一人であり、したがって彼女が我々読者のために構築するこのテクストは、彼女の痛みを隠すために書かれた苦心のテンプレートであるにすぎないのである。

非常に多くの女流ゴシック・テクストの特徴となっている教育的な田園風景は、ブロンテのローウッドでの生活の描写では裏返しになっている。そこは、無能であるとともに残酷な悪人によって運営されている地獄のような学校である。ブロクルハースト師には、偽善的で、宗教的なおべっか使い、ディケンズの描く悪漢、ラドクリフの描くゴシック的な修道院を支配している悪の天才にプロテスタント的ひねりを加えた存在が見出せる。ブロクルハーストは、ジェインに公然と嘘つきのレッテルを貼り、他の少女たちにジェインを拒絶するように仕向け、リード夫人の手先のように振舞っている。ちょうど、スケドーニが、ヴィヴァルディの母親と共謀してエレーナを迫害する際に、進んで彼女の道具となって働くのと同じである。年を取り性的魅力の衰えたゴシックの母親と、彼女から関心と資産を剥奪する脅威となる年頃の娘、そして、彼女を迫害しようと手ぐすねをひいている聖職者の取り合わせとともに、再び階級的争点が浮上する。しかし、リード夫人は、単なるおとぎ話に出てくる悪い継母の一人というだけではない。彼女は、突き詰めて言えば、高潔で引く手あまたのゴシック・ヒロインを殺すべく悪党の僧侶と陰謀をたくらむ全てのゴシック・アンチ・ヒロインを家庭的にしたような人物である。リード夫人はジェインがそこで死ぬことを望んで、ローウッドに行かせる。夫人の行動は、眠り姫を森に行かせる継母の行動とそれほど違いはない。ゴシックのヒロインたちは、かならず我々が世間と呼ぶこの窮地に送られ、無傷で脱出することを期待されている。そして、彼女らは――魔法のように――成し遂げるのである。ジェインも例外ではない。彼女の周りで他の少女たちが、恐るべき速さで死んでいこうとも、ジェインは、はかない人間の命を奪うインフルエンザに感染しない。彼女はヘレン・バーンズの腕の中で眠り、ヘレンの死の床から、抑制はされているけれども、より強くなった若い女性として目覚める。ローウッドで、ジェインは死の影の谷を通り抜け、彼女に畏怖の念をあたえる相手――彼女の夫になる人物――に向き合う準備を整えて現れるのである。

しかし、ジェインが、儀式的な傷を負った場所であるローウッドを去ることが出来る前に、そこで出される数々の挑戦を受けてたち、そして、対戦相手に勝たなければならない。ブロクルハーストに汚名をきせられたために、彼女は、「粉々にされ、踏みつけられた」

と感じており、そして実際、恥辱のために「死ぬ」ことを望んでいる。「生きているより死んだほうがずっとましだわ、孤独で、憎まれるのは耐えられないわ」と。しかし、彼女はまずヘレン・バーンズの友情によって、次に、テンプル先生に支えられて息を吹き返す。ヘレンは久々に復活した感傷小説のヒロインの事実上の体現者だ。クラリッサのように、彼女はしきりに死後の人生を切望している。彼女はジェインに、「人間への愛にあまりにも大きな」価値を置くことは危険であると警告し、ジェインに他人の意見ではなく自分自身の良心の中で生きるように忠告している（60）。ヘレンはいわば、この堕落した世界にはあまりにも善良すぎ、そして世間は手早く彼女を始末するのである。憎むべきスキャチャード先生は、白昼夢を見ているとの理由でヘレンを殴る。保護する父親のいないヘレンは、ローウッドではあたりまえである略奪の横行する食事時の狂乱の格好の獲物である。実の父親に捨てられたヘレンは、代わりに、「全能の普遍的な神」の神殿で、男か女かはっきりしない神性に礼拝をささげる。「それが精神と肉体を分離し、私たちに完全な報いを授けてくれる」（70,60-61）のだ。ヘレンの宗教は、感傷的イデオロギーの当然の結果であり、そして、それは、不運にも、クラリッサにとってそうであったように、このテクストでも危険で時代遅れなものである。

しかしながら、生き延びたのがジェインであって、ヘレンでなかった主な理由の一つは、彼女が親しい友人や相談相手に「〔自分の〕苦難や憤りの物語」（50）を繰り返し語るジェインの能力、いやむしろ強迫衝動に関係している。彼女の最初の観客はベシーであり、その後ロイド氏、それから、ヘレンとテンプル先生に引き継がれている。自分を言葉によって、非道と残酷な虐待の非のうちどころのない犠牲者に仕立て上げることで、ジェインは、あらゆるゴシック・フェミニストが生き延び、そしてうまくやって行くために学ばなければならない最初の教訓、すなわち語る能力を学ぶ。ローウッドで出口を見付けることが出来ない限り、彼女は永久に犠牲者としての子供時代の話に閉じ込められたままになることを学ぶのである。逃れる手段は、「自由、興奮、喜び」（75）への彼女の強い願望であるように思える。怒りっぽい女学生としてローウッドで暮らした後、年頃の女性となったジェインは、彼女が想像している「広く」、「さまざまな分野での希望と不安、刺激と興奮」に満ちていると彼女が想像する「現実の世界」を切望している。ジェインは、彼女自身そうでありたいと空想している精力的なゴシック・フェミニストのように、「さまざまな危険の中で、人生について本物の知識を求めるために、広い場所に出て行く勇気」（74）を持ちたいと望んでいるが、彼女はゴシック的女性冒険家ではない。彼女にはイタリア・アルプスへの旅行はない。ジェインは、その代わり、「もっとつつましい願い、すなわち、変化と刺激」を自分が強く望んでいるのだと知るが、しかし、その願いさえ控えめなものとなり結局、ジェインは最終的に既知の慣れ親しんでいるもの、すなわち「新しい奉仕！」（74）を求めるのである。それは、かつて誰一人として本当に彼女を信頼してくれなかったために、自分自身を信頼するという、それだけのことが出来ない若い女性の姿だ。彼女は、「人生と活動」を求めているのだと思っているが、「苦境」に陥ることを恐れているのである。彼女は母親の身を滅ぼしたようなスキャンダルが彼女の運命であることを恐れている。そのため、彼女は「なによりもまず」「立派で、感じよく、きちんとしている」（77）

ことを望む。簡単に言えば、ジェインは、自分自身と相入れない欲望やエネルギーを闘わせている戦場なのである。

しかし、『ジェイン・エア』はまた、ヴァージニア・ウルフ（Virginia Wolf）が、「フェミニストの噴出」(注19) と呼んだものに満ちており、その最初のものは十二章で起きている。ジェインが、ソーンフィールドで家庭教師（ガヴァネス）の仕事を受け入れる決心をした後、彼女は身動きの取れない狭い運命と彼女が生きてきた境遇を対照させている。彼女は、惨めであるが、しかし、彼女のように「あまりにも厳しい制限、あまりにも極端な沈滞」に苦しみ、「その運命に静かな抵抗」（96）をしている何百万という他の女性たちのことを考えることによって、自分の惨めさを慰めている。ゴシック・フェミニズムは、実際の行動を起こすことを断念して、このパターンの言語的習性にかなり厳密に従っている。ゴシック・フェミニズムは、泣き言を芸術的形式にまで高めるのだ。他のゴシック・フェミニストのように、ジェインは、独立し冒険を遂行する機会は持っていたのに、自信のなさと恐怖心から上流階級の安全な屋敷に逃げ込むことを選択する。プロットの仕掛けのひとつは、冒険と解くべき謎が彼女にもたらされるのは家庭的な住居の閉ざされた領域の中においてであるということだ。幸いにも、ジェインは、見事にともかくもゴシック・ヒーローと狂ったゴシック・アンチ・ヒロインとそして、由緒正しい屋敷を手近に発見するのである。

原注

14. 『ジェイン・エア』を模範的な「女性のテクスト」としてその正典的な地位を確かで揺ぎないものにしたのは、*The Norton Anthology of Literature by Women* , ed. Sandra M .Gilbert and Susan Gubar （New York: Norton, 1985）,347-735. における完全復刻版であり、これは多くの批評家を仰天させた。『ジェイン・エア』についての Gilbert とGubarの影響力を持つ分析である、"A Dialogue of Self and Soul: Plain Jane's Progress," in *The Madwoman in the Attic*, 336-71は、この小説についての論議で、今なお一番引用頻度が高い。
15. 『ジェイン・エア』からの引用は全て、Norton Critical Edition,2ded., ed. Richard J.Dunn（New York: Norton, 1987）に拠る。ページ数は括弧内入れ、本文中に表示する。
16. 『ジェイン・エア』の文学的難解さを扱った分析としては、Mark Hennelley,Jr., "Jane Erye's Reading Lesson, " *ELH* 51(1984), 693-717を参照。ロマン派及びゴシックのテクストの世界へのジェインとシャーロットの没入の全く異なる解釈として、Karen Rowe, "'Fair Born and Human Bred': Jane Eyre's Education in Romance," in *The Voyage In: Fictions of Female Development*, ed Elizabeth Abel, Marianne Hirsch, and Elizabeth Langland（Hanover: University Press of New England, 1983）, 69-89;およびJerome Beaty, *Misreading 'Jane Eyre'*（Columbus: Ohio State University Press, 1996）を参照。
17. Michele Massé は、彼女の本、*In the Name of Love*において、迫害の心理的力学が、現実の制度上の女性差別において作り出されていることを考察している。*Jane Eyre* を取り上げた章の表題、" Looking Out for Yourself: The Spectator and Jane Eyre,"192-238は言い得て妙だ。*Jane Eyre* を犠牲者の物語というゴシック的雰囲気の中に位置付けて論じたものには他に、Joanna Russ, "Somebody's Trying to Kill Me and I Think It's My Husband: The Modern Gothic," in *The Female Gothic*, ed. Juliann Fleenor（Montreal: Eden, 1983）, 31-56; Peter Bellis, "In the Window-Seat: Vision and Power in *Jane Eyre*," *ELH* 54(1987), 639-52などがある。
18. ブロンテがアン・ラドクリフの作品、特に『イタリア人』を読み、影響を受けている証拠は、ブロンテの小説、*Shirley*, ed. Herbert Rosengarten and Margaret Smith（Oxford: Clarendon, 1981）,398-

99におけるCaroline HelstoneとRose Yorkeの往復書簡の中に記されている。

19. *Jane Eyre* での「フェミニズムの噴出」に対するウルフの反発と非難は、彼女の評論、"*Jane Eyre and Wuthering Heights*," in *The Common Reader* (New York: Harcourt,1925)1219-27に記されている。

訳者注

文中の『ジェイン・エア』からの引用の訳は，次の訳書を参考にした。
大久保康雄訳『ジェイン・エア』（新潮文庫）1953
遠藤寿子訳『ジェイン・エア』（岩波文庫）1957
小池滋訳『ジェイン・エア』みすず書房（「ブロンテ全集」）1995-97

訳者覚書

本翻訳は、「女流ゴシック小説研究グループ」（仮称）の研究企画の一環として2002年３月にスタートした。序論、シャーロット・スミス、ジェイン・オースティン、シャーロット・デイカー、メアリー・シェリーに関する各章の翻訳は千葉麗（奈良教育大学非常勤講師）が担当、序論、アン・ラドクリフの章は村尾純子（大阪工業大学嘱託講師）、序文、アン・ラドクリフ後半、ブロンテ姉妹の各章は筆者が担当している。